

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 倉内 美智子	留学機関名 ハルトゥーム大学 社会人類学研究科
留学先国名 スーダン共和国	留学期間 西暦 2008 年 10 月 ~ 2009 年 9 月
研究テーマ 故郷の山地と世界をつなぐ人々—スーダン内戦後を生きるヌバ人のネットワークの構築	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p><b>【研究の概要と目的】</b></p> <p>20 世紀後半にアフリカ大陸各地域をはじめ世界諸地域で顕著になった内戦や武力紛争は、21 世紀に入った今日もなお続き、世界諸地域で年間数百万人の死者や国内外への避難民を生み出している。申請者は、こうした 21 世紀という時代が抱える問題群の一つである内戦および、内戦後に忘れ去られた存在となってしまう元避難民の生活世界の再建に関心を寄せている。こうした故郷から放逐された人々の生活再建をテーマとする本研究は、アフリカのみならず現代の問題群のただなかに生きる人々を照射することが可能という点で、まさに現代の人類学のテーマといえる。</p> <p>北アフリカのスーダンで起きた内戦 (1983~2005 年) は、これまでに 200 万人以上の死者、数百万人の国内外への避難民を出した。本研究は、20 数年に及んだスーダン内戦により、スーダン都市部、故郷のヌバ山地、日本と離散して暮らすこととなった複数のヌバ人家族を対象とし、これらの人々の戦後復興における「下から (=個人レベル) の生活再建」と、離散した家族が今後も目指す「故郷復興」の戦略を、ライフ・ヒストリーという手法を用いて再構成することを目指している。本研究の目的は以下の 3 点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ヌバ人の元国内避難民の、スーダン都市部における生活再建の過程を明らかにすること</li> <li>2) 故郷復興をめぐるヌバ人家族のトランスナショナルネットワークを明らかにすること</li> <li>3) 1、2 を通じて、内戦後を生きる人々の「死から生へ」の生命・生活再生の諸相を照射すること</li> </ol> <p><b>【本研究の意義】</b></p> <p>スーダン内戦に関する日本における研究としては、スーダン南部のパリ人を研究対象とする栗本英世が、スーダン都市部におけるエリトリア難民の経済活動と家族関係の変化に関する実証的な研究としては、自身もエリトリア難民であるガイム・キブリアブ (Kibreab, G) などがあげられる。しかし、内戦中のヌバ山地およびヌバ人に関する実態的な調査に基づいた人類学研究は、日本では現在も皆無といえてよい。そうしたなか本研究は、内戦という悲惨な体験を経たヌバ人の元避難民の生活再建の戦略に焦点を当て、ライフ・ヒストリーという手法を通じて個人の現在の「生の人生」を描き、彼ら/彼女たちが生きる社会全体像を捉えることを試みる。国際政治学や平和学の分野では、避難民の発生原因である内戦や武力紛争、内戦後の復興支援の在り方などが焦点であり、避難民の生活世界、特に内戦後を生きる元避難民の生活世界については見いだされてこなかった。こうした点から鑑みても、申請者の研究は独創性に富み、社会科学においても意義のある内容といえる。</p> <p>以上から、北部イスラーム圏における最大の非アラブ系集団であるヌバ人の戦後復興を論じる本研究は、内戦後スーダンのみならず将来におけるアフリカ情勢の展望を開くうえでも、社会的に画期的かつ重要な意義をもつ研究といえる。</p>	

# 成果報告書

記入日 2010年 10月 1日

氏名 倉内美智子	留学先国名 スーダン共和国	所属機関 ハルトウム大学アフリカ・アジア研究所
----------	------------------	----------------------------

研究テーマ: 故郷の山地と世界をつなぐ人々—スーダン内戦後を生きるヌバ人のネットワークの構築

留学期間 : 2009年 6月 ~ 2010年 4月

## ■本事業の概要

本調査は、2009年6月から2010年4月の約10ヵ月間、内戦終結から4年を経た北アフリカのスーダン共和国において、元避難民の生活再建の戦略を明らかにすることを目的とし行ったものである。

調査対象者である「ヌバ人」は、地理的にも北部スーダンと南部スーダンの中間に位置する、ヌバ山地(南コルドファン州)に暮らす数十からなる民族集団である。当該地域では、古来よりイスラームと伝統的な宗教を信仰する者が混在しており、このため内戦中にヌバ山地に侵攻した北部政府軍は、この地を「イスラーム教の浸透およびアラブ人の増加を進めるべき」、北部州のフロンティアとみなした。1990年代には強制移住や土地の収奪をはじめとし、民族浄化という名のもと殺戮が行われた。北部政府軍との抵抗戦線の過程で、それまでのヌバ山地の歴史には見られなかった「ヌバ人」というアイデンティティが誕生したことは、修士論文で仮説検証し、これまでの短期調査でSPLA/ SPLM(Sudan People's Liberation Army/ Sudan People's Liberation Movement)の幹部数名からインタビューを行い明らかになっている。内戦下の被害から逃れるため、ヌバ人は首都がおかれるハルトウム州や周辺諸国に避難を始めた。2011年の南北分離を占う選挙が迫る2010年現在も、推定4万人といわれるヌバ人が首都近郊に暮らしているといわれる。

本研究の目的は、これらの人々の戦後復興における「下から(=個人レベル)の生活再建」と、離散した人々が目指している「故郷復興」の戦略を明らかにすること、同時に、広くスーダン社会の全体像に近づくことであった。調査手法は、調査対象者と生活をともにする参与観察、聞きとり調査の実施、ライフ・ヒストリーなどの一次資料の収集、立公文書館ほかにおいて行われた二次資料の収集からなっている。

## ■研究の経過および明らかになった点

今日のスーダンでは、スーダン政府と中国企業の連携による南部地域での油田開発や、ナイル川河畔の肥沃な土地を利用したプランテーション農業や首都ハルトウムに経済特区を設ける計画が進められ、政府主導の経済開発がおこなわれている。他方、内戦中に激戦地であった諸地域には国連や諸国際NGOが拠点を置き、地域社会の安定化や生活改善が進められている。本調査は、こうした状況下で2005年の内戦終了からまる4年を迎え、包括的和平合意(CPA: Comprehensive Peace Agreement)で定められた内戦後初の大統領選挙および州・県・村落議員他からなる総選挙への機運と緊張が高まる、2009年6月から2010年4月に行われた。

現地調査の課題として、(1)ハルトウム州での参与観察、(2)ヌバ山地における多面的なフィールド調査、(3)日本や中国を生活の基盤とするヌバ人の参与観察やインタビュー調査、の3点があげられていた。まず課題(1)と(3)に先行し、(2)について計画に変更があったことを報告する。

### ●課題(2)ヌバ山地における多面的なフィールド調査について

本課題は、ヌバ山地において、経済、社会関係(得に村落復興、ネットワーク)、土地制度、宗教などの生活再建の基盤を明らかにすることが目的であった。しかし、上記のとおり政治的にセンシティブな地域を対象とする調査ということで、スーダン政府より旅行許可証が下りず、その交渉に難航した。また、旅行許可証の交渉中に受領者が虫垂炎に罹患し、現地での手術および療養が必要となったため、本課題を保留することとなった。この課題を補足するため課題(1)に重点を置き、首都および近郊でさまざまな職種のヌバ人および南部スーダン出身者から聞き取り調査を行い、他方でアラブ系住民宅においても参与観察を行なった。

以下に、課題(1)と(2)の詳細を報告する。

### ●課題(1)ハルトウム州での参与観察

2009年6月から翌年4月まで、ハルトウム州オムドゥルマーン市およびハルトウム市において、断続的に労働者を中心に聞き取り調査を行った。首都に暮らすヌバ人の多くが、道路での洗車業やそれらの労働者を相手にした紅茶売り(女性のみ)、ナイル川河畔に設けられたプランテーションでの肉体労働などの、スーダンにおける下層労働を生業としている。また、大工仕事の請負業や貿易業など、個人企業を営んでいるものも多い。「アラブ(人)の支配する北部スーダンでは、ヌバ人は公職にもカネが入ってくる職業にも就けない」と彼ら彼女たちが口にする程、職業の機会がアラブ系住民とは異なったものとなっている。こうした労働者の多くが、機会さえあれば国外での出稼ぎを望んでいる。また、こうした状況故に、調査対象であるヌバ人も貿易業を生業として選択していることが判った。

アラブ系住民と南部の差別や確執は、スーダン内戦下で意図的に形成されたものと一般的に言われている。参与観察において両者の関係性が顕著に見られたのは、イスラームのラマダーン(断食)期間に行われる饗食である。参与観察を行うため寄宿していたヌバ山地出身者宅では、アラブ系住民が訪れることは一切なく、同郷のヌバ山地から共に避難してきた知人または南部スーダン出身者のイスラーム教徒に限られていた。他方、知人のアラブ系住民宅においても、ヌバ人や南部スーダン出身のイスラーム教徒が呼ばれることはなかった。

また、内戦当時(2004年～2007年にかけて)ケニアのカクマ難民キャンプへ避難を余議なくされたヌバ山地出身の女性から、内戦下で学業を断念した経緯、SPLA/SPLMの将校との結婚・妊娠・出産、夫との別離と避難の過程、難民キャンプでの子育て、ヌバ山地への帰還、現在のヌバ山地における生活などの詳細なライフ・ヒストリーを、参与観察を通じて得ることができた。

2009年11月から内戦後初の総選挙が迫る4月にかけて、参与観察の場所を同州のハルトウムS地区に移し、オマル・ハッサン・アフメド・アル=バシール大統領への熱烈な支援を示すアラブ系住民と生活を共にし、比較調査に努めた。この参与観察からは、イスラームの慣習に基づく家族親族や近隣住民との緊密な関係性、カネの運用などの生活の諸行為、政治政党の支援、寡婦の生業や寄り合い等について、ヌバ人家族との比較研究の機会を得ることとなった。

### ●課題(3)日本や中国を生活の基盤とするヌバ人へのインタビュー調査

ヌバ人は親族間の連帯意識が強く、殊に内戦という生命・財産・住居を脅かされた経験から、親族内での互助関係が生活再建の一基盤となっている。調査対象者は、内戦時にヌバ山地において北部政府軍への防衛戦線を張った SPLA/SPLM のリーダー、故ユースフ・コワ・マッキーの妻、兄弟2人、甥3人、姪1人である。特に、甥の一人は叔父たちの人的コネクションにより難民申請を受け、内戦中に16歳でノルウェーに避難した経緯をもつ。調査対象者は、Martin Trading & Investment という貿易会社を香港で経営し、母親ほか親族のいるスーダン、コーヒー豆の輸入業を営む叔父と兄が暮らすオランダ、弟のいる中国を結び輸入業を展開している。空港への荷物の受取などに同行したところ、その商品の多くが、国連職員や NGO 職員のアパートメントに置かれるという大型家電や大型家具、近年スーダンでステイタスシンボルの一つとなっているデジタルカメラ、日常生活に不可欠の携帯電話などであった。こうした消費者からの注文は、「きょうだい」と呼ぶ同郷の友人・知人の紹介によるところが大きい。商品の仕入れは、携帯電話による国際電話を介して行われ、買い付けから発送まで全て調査対象自身か国外に暮らす兄弟が行なっている。この兄弟は現在、ヌバ山地の州都カドゥグリにおいて、国際 NGO や国連職員をターゲットにしたカフェレストランの経営を企画準備中である。同時に、同地で娯楽として人気の高いサッカーに焦点を当て、自身の名を冠したチームを運営している。人的コネクションを最大限に利用し、国連や国際 NGO 職員から外貨を得る個人貿易業を営むのみならず、故郷のヌバ山地においては文化事業を展開するという、したたかでダイナミックな再建過程の詳細が明らかになった。

また、参与観察と並行して SPLA/ SPLM の幹部数名から聞き取り調査を実施したほか、ヌバ山地出身の人類学者であるグマア・クンダ先生との数回に及ぶ面会の機会を得て研究方法へのご指導を頂いたほか、2011年に予定されている南部独立を占う住民投票、ヌバ山地の帰属問題等について意見交換を行うことができたことも併せて報告する。

結論として本調査から、参与観察を通じて歴史資料の収集や定性/定量的データの収集ができたといえる。また、可視化されにくかった内戦後を生きる元避難民の生活世界およびスーダン社会に関する、より実証的で総合的な成果が得られたと考える。2010年4月の総選挙を終えて、2011年には南部スーダンの分離を占う住民投票が予定されている。南部スーダンの分離・独立決定後も、ヌバ人をはじめ南部スーダン出身者(特に、移住者の第二世代)の多くは、生業や生活基盤の在るハルトウム州に留まるものと考えられる。本事業を通じて、ヌバ人のトランスネーションネットワーク形成のみならず、日常レベルでのアラブ系住民や南部スーダン出身者との関係性等についても多角的な知見を得られたことは、今後のスーダン復興や南部分離後のヌバ人を論じていくうえで有意義なものとなると考えられる。

### ■本事業終了後の計画

本事業を通じて得られた一次資料をもとに、「女性が街頭(ストリート)で働く時—内戦後スーダンの紅茶売りの事例から」(仮題)と題した論文を作成中であり、平成23年度の『総研大 文化科学研究』に投稿を予定している。また、平成23年4月のナイル・エチオピア学会において、本事業と同タイトルでの口頭発表を予定している。今後は本事業で得られた成果をもとに短期調査を重ねつつ、2012年の提出を目指して博士論文の作成にあたっていく所存である。